

# 日本語学習素材としての1881年刊『新約聖書 馬可傳 俗話』 —明治前期に来日した外国人宣教師むけ日本語テキストの文体—

松 本 隆

## 【要旨】

1883（明治16）年に日本各地の外国人宣教師が大阪に集い、福音伝道の発展とその前提となる言語習得などの諸課題について検討する会議を催した。その席上、新たに来日する宣教師への日本語学習指針が提案され、あわせて学習素材も具体的に示された。その中に1881年刊『新約聖書 馬可傳 俗話』が含まれる。宣教師会議はこの口語訳マルコ伝をおもに話し言葉の学習用に推奨しているが、本稿はそれを追認しつつ、各種の文体への対応力を育む素材としても利用価値の高かったことを指摘する。このマルコ伝は、「…でござります」や「…である」といった口語体を主用し、あわせて文語の「…なり」や「…べし」なども残存させ、目的に応じて使い分けている。言文一致が確立する以前の文体模索期にあって、このマルコ伝は、多様な文体をその表現価値がわかりやすい文脈の中で提示しているため、話し言葉と書き言葉の両方への習熟を促進させる教材になりえた。

## 【キーワード】

井深梶之助、W.Imbrie 編『交易問答』、G.W.Knox 編『心学道の話』、C.S.Eby 編『鳩翁道話』、C.S.Eby 述『<sup>まこと</sup><sup>いのち</sup>真の生命』

◎付録『新約聖書 馬可傳 俗話』電子化資料

[pdf版](#)、[テキストファイル版](#)（クリックしてダウンロードする）

## 1 はじめに：宣教師会議が推奨する日本語学習の素材

1883（明治16）年4月に大阪で宣教師会議が開催され、関西（おもに京阪神地域）と関東（おもに京浜地域）をはじめ日本各地からプロテスタント諸派の外国人宣教師が集った（Publishing Committee 1883、竹本 2004）。

この会議では伝道に関する諸課題が話し合われ、伝道の前提となる言葉の問題も取り上げられた。事前に組織された10名からなる日本語教育課程委員会（Publishing Committee 1883:xii、竹本 2004:370）によって、来日宣教師のための日本語学習課程のモデル案が会議で示された。仮名の読み書きから開始し、3年間をかけて日本語で説教ができるレベルまで到達することを目指す案である。その間に用いるテキストとして以下11種の資料が列挙されている（Publishing Committee 1883:279-280、竹本 2004:372）。

①Hepburn's and Satow's Dictionaries. ②Imbrie's Handbook. ③Satow's *Kuai-wa Hen*. ④Brinkley's *Go-gaku Hitori Annai*. ⑤Aston's Grammar of the Written Language. ⑥Gospel of Mark (version in the Spoken Language). ⑦*Kōyeki Mondō* (Imbrie's Edition). ⑧*Shingaku Michi no Hanashi* (Knox's Edition). ⑨*Kiū-ō Dō-wa* (first three sermons). ⑩The daily newspapers. ⑪New Testament (Permanent Committee's version).

このうち本稿では、⑥口語訳マルコ伝福音書に注目し、日本語学習素材としての特色と活用方途を検討する。その前に次節で、宣教師会議の報告内容 (Publishing Committee 1883:279-287) に即し、3年間の学習課程の概要を確認しておく。これを踏まえ第3節以降、⑥口語訳マルコ伝の利用価値について、他書との関連も念頭におきながら考察していく。なお本稿では、報告書に記載のない書誌情報なども必要に応じて補った。

## 2 来日宣教師のための3ヶ年日本語学習課程モデル案

宣教師会議報告書は、⑥口語訳マルコ伝が読解素材としても英文和訳のモデル完成文としても利用価値が高いことを指摘している (Publishing Committee 1883:282-283)。マルコ伝の英文和訳練習は、英語の聖書を原文とし、⑩文語訳の新約聖書 (聖書翻訳委員会『新約全書』1880年刊) から必要な語彙・表現を借りつつ、①E.M.サトウと石橋政方の共編『*An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*』(1876年初版、1879年第2版、邦題として英和口語辞典もしくは英和俗語辞典と通称される) で不足する言葉などを補い、②W.インブリー著『*Handbook of English-Japanese Etymology*』(1880年初版、英和会話文法便覧、以下『*Handbook*』と略す) の索引部分を辞書のように参照して文章を組み立てながら、学習者 (来日宣教師) 自身がマルコ伝を口語で和訳する練習である。⑥の口語訳を手本に、自己の和訳と照合し、修正・補強する練習を日々積みかさねて口語表現の運用力を高めていく。この練習は、宣教師に必要な聖書用語の習得ばかりでなく、将来の説教に備えることにもつながる。なお、①の「ヘボン辞書」は言わずと知れた J.C.ヘボン編『和英語林集成』(1867年初版、1872年改訂再版) である。

口語訳マルコ伝を用いた読解と英文和訳の練習は、3年間の学習課程のうち最初の1年目の後半に位置づけられる。口語訳マルコ伝に続く読解素材として、⑦W.インブリー編『*交易問答*』(1881年刊) が示されている (Publishing Committee 1883:283)。

以上の練習に先立つ初年度前半の入門期は、まず仮名文字 (平仮名とカタカナ) の読み書き練習から始め、③E.M.サトウ著『*会話篇*』(1873年刊) 1~11課の読解ならびに、②『*Handbook*』を用いた文法の基礎学習にあてられる (上掲書 281-282頁)。

マルコ伝の英文和訳が初年度に完了し、学習課程の2年目に入ると、マルコ伝以外の新約聖書の諸文書に英文和訳の手を広げつつ、日本語で説教をする準備に取りかかる。2年目の読解は、初年度後半から引き続く⑦『*交易問答*』に加え、⑧G.W.ノックス編『*心学道*

の話』(1882年刊)を教材とする。また④F.ブリンクリー著『語学独案内』(1875年刊)が英文和訳の実力向上用テキストとして推奨されている(上掲書284頁)。

⑦『交易問答』と⑧『心学道の話』は、既存の日本人むけ出版物を外国人学習者用に加工したもので、シリーズとして企画編集したことを双方の序文が記している。⑦は変体仮名の五十音順一覧表、⑧は基本漢字の部首別一覧表を冒頭に付し、文字学習の便宜を図っている。のちに『心学道の話』の一部をローマ字化したものが、②『*Handbook*』の1889年第2版に対訳・注釈つきで盛り込まれた。そして『*Handbook*』は「1908年の再訂5版まででており、教科書として広く用いられた」という

(<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/senjin/>)。

仕上げとなる3年目は、いよいよ説教の練習に取りかかる。そのための読解素材として、⑨『鳩翁道話』の「the first three sermons」が挙げられている。これは『鳩翁道話』正・続・続々編のうち正編の「一の上・下」と「二の上」にあたる。報告書はこれら3話の英訳がA.B.Mitford訳『*Tales of Old Japan*』(1871年初版、1874年第2版)にあり、またJ.O'Neill著『*A First Japanese Book for English Students*』(1874年刊)が優れた出版物であると指摘する(上掲書284頁)。O'Neillが教材化した「*Kiu-ō Dō-wa: Ni no Jō*」は、縦書きの和刻本と、横書きのローマ字版が、左右見開き2頁で対照できる体裁をとり、ローマ字版には行間に逐語訳と文意を挿入し、かつ脚注も施す。さらに「二の上」全体の語彙をアルファベット順にまとめて学習の便を図っている。また報告書に記載はないが、日本語教育課程委員のC.S.Ebyは、1881年に『*Kiuō Dōwa: Ichi no Jō*』を出版しており、その後1892年に『*Kyūō Dōwa: Ichi no Jō and Ichi no Ge*』を出版することになる。これらは2冊ともローマ字版で、語彙表と注解が付されている。結局、⑨『鳩翁道話』はEbyとO'Neillの2人が分業する形で「the first three sermons」の教材化がなされたことになる。

さらに報告書は、⑩日刊紙の読解練習も開始するべきだとし「the news department of the *Nichi Nichi Shimbum*」つまり『東京日日新聞』の雑報欄を最良の素材として勧める。また、②『*Handbook*』、③『会話篇』、⑦『交易問答』、⑧『心学道の話』を繰り返し読み直すことを委員会は推奨する。そしてこの時期に、⑤W.G.アストン著『*A Grammar of the Written Language, with a Short Chrestomathy*』(1872年刊、日本文語文典/日本文語文法)を参照しつつ、⑪文語訳聖書の研究に取り組むことが望まれている(上掲書284頁)。

以上11種の教材群のうち、読解と発話の教材の中心をなす⑥～⑨が「ござります」体を基調にしている。委員会が「ござります」体を、丁寧な話し言葉の標準モデルとして、また書き言葉の口語体のモデルと捉え、学習者に習得を促していたことがわかる。

### 3 口語訳マルコ伝が使い分ける3種の文体の相互関係

宣教師会議報告書の⑥Gospel of Mark (version in the Spoken Language) は、邦題が具体的

に示されていないが、当時いち早く口語訳を終えていた『新約聖書 馬可傳 俗話 全』（井深 1881）がこれに当たる。書名中の「俗話」は表紙に貼られた題簽にだけ見られ、表題頁の内題は先行する文語訳と同じ『新約聖書馬可傳』で、本文1頁冒頭の題名も『新約聖書馬可傳福音書』で文語訳と変わらない。この口語訳は、通俗平易な日常表現を用いながらも、聖書にふさわしい格調たゞよう名訳として多くの人々に愛読され続け、異なる版も後続した（藤原 1974:149-150、海老澤 1989:323、本稿の第9節末「資料」参照）。

⑥口語訳マルコ伝は、⑩文語訳聖書に比べて、語彙・表現・文体がより日常的に言い換えられている。そのため話し言葉に応用できる日本語を⑥から学ぶことができる。聖書に特有な語句を平易に言い表す資料として⑥は有用であるうえ、話し言葉全般を学ぶテキストとしての利用価値も高い。日本語教材に限られた当時の状況にあって、宣教活動に不可欠な話し言葉の学習素材として⑥は貴重な存在だった。

さて、⑥口語訳マルコ伝は文末の断定表現として、一般人に「…でございます」を、イエスに「…である」を主用し、両者の言葉づかいを明確に区別しながら人物造形をしている。さらに、父なる神の声と、旧約聖書からの引用には、文語体を用いる。つまり神とイエスと一般人の3者は、言語的に平面の関係でなく、上下の立体的な階層構造の中で関係づけられている。天から届く神の声は、身近さの度合いが最も小さく、特定的人格と結び付かない書き言葉つまり文語体の「…なり」を用い、脱人格化（神格化）した特別な存在として描かれる。これら3者の文体差と、それが読者に与える心理的な距離感つまり親疎の度合いは次のようにまとめられる。

	《使用する文体》	《文末》	《距離》
天の声	書き言葉（非日常的）	「なり」	遠
イエス	非日常的な話し言葉	「である」	中
一般人	日常的な話し言葉	「でございます」	近

複数の文体を併用する本書を素材に用いれば、各文体が生み出す表現上の効果を知り、その使い分けを学ぶことができる。以下、次の第4節で「でございます」体を、続く第5～6節で「である」体を取り上げ、第7節で文語体について検討していく。

#### 4 前近代の「ござる」から近代の「ござります」への交代に伴う表現価値の変化

口語訳マルコ伝は、地の文（の語り）と、一般登場人物が発話する文末に「ござります」調の敬体を用いる。「ござります」は前近代の武士的な辞法「ござる」が1881～85（明治14～18）年ごろ衰退するのに伴って勢力を増した表現である（山本 1965a:289, 1965b:157）。

「ござる」については1866（慶応2）年に、ひらがな論者の前島密（來輔）が徳川将軍にあてた国語表記改革に関する建白書「漢字御廃止之議」の中で、言文の一致にも触れ、「ござる」等の日常表現を用いて文章を綴ることを提言している。「ござる」は、口にす

れば話し言葉、筆にすれば書き言葉として両用可能という前島の認識が同建白書に記されている。

実際、幕末・明治初年の頃まで「ござる」は口語志向の文章によく用いられた。例えば『交易問答』は1869(明治2)年の初版の時点で「ござる」体が採られていた。それが1881年の⑦インブリー版では全面的に「ござります」体に改められている。「ござる」から「ござります」への交代劇が『交易問答』の新旧両版間に見られるのである(吉野 1929:3-5、山本 1968:19-20、李 2010:53, 2011:6)。この更新は、編者インブリーによるものではなく、原著者の加藤弘之(弘藏)による第2版(1881)改訂を引き継いだものだという(吉野 1929:5、山本 1965a:289)。

江戸時代の講述形式の文章における「…でござる」は、敬語でありながら敬意が薄れて待遇度が中立化し、また個人的でなく公共性の高い表現として用いられた。そのため文語体の「…なり」や「…べし」とも共存し、叙述内容の重みに応じて「ござる」基調の文章内で「…なり」が用いられるなどした(木坂 1976:143-152)。

前代の「ござる」と交代する形で勢力を増した「ござります」であるが、「ござる」の文体的な表現価値は、次節でみる「である」によって引き継がれることになる。というのは、「ござります」は敬意が濃厚で、文末の断定表現(指定の文末詞)としてのみ純粹に機能しにくいからである。どうしても過剰な丁寧さを伝えてしまい、また冗長なため、書き言葉の文末辞法には向かないという欠点を内包する。

日本語教育課程委員会が推奨する「ござります」体は、丁寧な話し言葉の標準モデルとして、その後も学ぶ価値が減じることはなかった。しかし、書き言葉としての「ござります」体は、近代文体の有力候補として留まることができず次第に退いていったのである。

## 5 透明な文体「…である」によって造形されるイエスの人物像

口語訳マルコ伝においてイエスの発話を特徴づける「である」は、江戸時代においては、漢学者の講釈、国学者による古典の口語訳や注解、僧侶の説教など、発話に基づく講述形式の文章に見られ(山口 2006:162)、また明治10年代からは演説や講演などに用いられるようになった(山本 1944:139-140, 1965b:575)。いっぽう実際の発話を前提としない書面語としての「である」は、明治の言文一致運動で大きな役割を果たし、明治30年代から現在に至るまで口語諸文体の中で最も優位を占めている言文一致体として広く用いられ続けてきた(山本 1965b:29)。つまり「である」は「話し言葉であるけれども、書き言葉風の硬いところがあって、ふつう日常茶飯の話し言葉としては用いられない」(野村 2013:310)特殊な性格をもつ文末辞法なのである。

敬意を積極的に表す「…でござります」が「直接読者に働きかける表現形式」(山口 2006:204)なのに対し、敬意を含まない「…である」は「教養層に用いられる、公的な性

質をもつ話し言葉」（同 162 頁）として性格づけることができる。

口語訳マルコ伝では、この「ござります」と「である」の文体差が、それを用いる人物像の造形に巧みに活かされている。日常的な丁寧体の「ござります」で語りかける地の文は、読者に親近感を抱かせる。他方、非日常的な普通体の「である」を主用するイエスの口調には、距離をおいて公言するような力強い威厳や品格あるいは高潔さといった雰囲気醸し出されている。

## 6 言文一致「である」体の先取り学習

上述のように口語訳マルコ伝は、地の文の「ござります」と並行して、イエスの発話に「である」を用い、旧約聖書の引用など一部に文語体を残す。「である」はイエスのほかに、弟子同士（第 8 章 16 節ほか）や「<sup>ひやくしやう</sup>農夫」同士（第 11 章 31 節）など、対等の同輩間で互いに論じ合う場面でも用いられる。

標準的な日常口語を反映した「ござります」であるが、話し言葉そのままの敬体が書面語としては読者の目に冗長に映る。いっぽう「である」は、文語の断定表現「なり」と同じく、敬意を伴わない簡潔さゆえ、客観的な論述・描写に適しており、明治 30 年代以降、言文一致体の主流の座を占めることになる（山本 1965b:29）。

例えば、口語訳マルコ伝の第 2 章 17 節「<sup>すこやか</sup>康強な<sup>もの</sup>者は<sup>いしや</sup>醫者の<sup>たすけ</sup>助は<sup>いら</sup>需ぬが<sup>やまひ</sup>病のあるものが<sup>いる</sup>需<sup>わが</sup>める<sup>き</sup>ものである我來<sup>ただしい</sup>たのは<sup>まね</sup>義人を招くためではなく<sup>つみ</sup>罪ある<sup>ひと</sup>人を招て<sup>まねい</sup>悔改めさせるため<sup>きく</sup>である」にみる下線を付した「である」などは、現代の言文一致体の用法と大差がない。

この病人の喩えの前には「イエスはそれをお<sup>きき</sup>聞なされて〔…上記引用文…〕とおふせられました」という文言があり、上の引用を挟みこむ形で、発話内容であることを明示している。しかし上の引用部分だけを抄出しても、独立した論述文として読むことができる。このように口語訳マルコ伝は、近代の言文一致体を取捨するかのような「である」を豊富に含む。やがて隆盛となる「である」体の文章に適応可能な文体知識を、この口語訳マルコ伝で学べるのである。

## 7 文語体の学習への発展性

天から響く神の声は、次のように文語体で届く。第 1 章 11 節「<sup>なんぢ</sup>汝は<sup>あいし</sup>わが愛子<sup>よろこ</sup>わが喜ぶところの<sup>もの</sup>者なり」と、第 9 章 7 節「こは<sup>あいし</sup>わが愛子なりこれに<sup>きく</sup>聴べし」の 2 つがそれである。

現代語の感覚では、口語文中に文語体を混在させることは（引用などを除いて）ふつう許容されない。しかし第 4 節で前述したように、江戸時代の講述形式の文章では「ござる」が「なり」や「べし」と共存し、叙述内容の重さに応じて使い分けがなされていた（木坂 1976:143,152）。明治維新を迎えたとはいえ、近代的な文体を模索して様々な試みが実践

される中で出版された口語訳マルコ伝が、口語体の「である」と文語体の「なり／べし」を併用しても、当時の人々はさほど違和感を覚えなかったものと想像できる。

文語体は旧約聖書からの引用にも常用される。例えば第12章29～30節では「誠いましめのかしら」として、申命記の第6章4～5節が文語体のまま「イスラエルよしゆきけ主なるわれらの神かみはすなはち一ひとつの主なり なんぢ心こころをつくし精神せいしんをつくし意こころばせをつくし力ちからをつくして主なるなんぢの神かみを愛あいすべし」と引用されている。今日の文体感覚では、地の文の口語体に合わせて、引用部分も口語体に統一したくなるころだが、この口語訳マルコ伝はそうせずに文語体を温存している。非日常的な古形を用いることにより威厳や重厚さが醸し出される。

文語の表現は、⑥口語訳マルコ伝よりも、⑧『心学道の話』と⑨『鳩翁道話』により多く含まれる。そして、⑩『東京日々新聞』と⑪文語訳聖書では、もっぱら文語に取り組みことになる。段階的に文体の硬度が増し、易から難へ学習が進むよう、素材が配置されている。早い時期に、⑥口語訳マルコ伝で文語体に触れておくことは、後続学習への良き導入になったと考えられる。

## 8 おわりに：過渡期が生んだ多彩な文体の福音書

以上、本稿では口語訳マルコ伝の文体に注目し、この福音書が来日宣教師にとって、話し言葉の学習だけでなく書き言葉の学習にも、多目的に活用できることを確認した。

まず、口語訳マルコ伝の基調をなす「ござります」体は、当時の丁寧な日常語として一般的であり、話し言葉の標準的な手本とされた。幕末から明治前期にかけて日本研究の先駆をなした外国人の多くが『鳩翁道話』などを素材に「ござります」体をはじめ話し言葉の表現を学んだことが知られている（金沢 2013）。

また「ござります」体は説教にもふさわしい辞法であった。前述のごとく日本語学習3ヶ年モデル案の到達目標は、外国人宣教師みずから日本語で説教ができるようになることである。「ござります」体による説教の様子は、例えば『真まことの生命いのち：一名聖教講義記聞』などから窺うことができる（横浜市立図書館デジタルアーカイブ「都市横浜の記憶」で画像閲覧可〈<https://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/>〉）。本書は、先の第2節でも触れた日本語教育課程委員のイビー（C.S.Eby）が日本語でおこなった一連の説教を筆録したものである（沢田 1984:385）。週刊キリスト教新聞『七一雑報』は、1879（明治12）年1月10日付け第3面下段「教会新報」欄で本書の出版を報じ「語ことばも文章ぶんしょうも極ごく解わかりよく坂本安吉さかもとやす氏の輯録しゅうろくされし本ほんでござり升」と評する。

次に、イエスの人物像を引き立てる「である」体は、話し言葉としては特殊で、来日宣教師にとって見習うべき手本ではなく、むしろ言文一致の標準的な書き言葉文体を先取りするという意味で学ぶ価値が高かった。

そして、神の声や旧約聖書の引用に用いられる「なり」や「べし」などの文語体は、口

語訳マルコ伝に続く、文語訳聖書などの後続学習への準備として機能したはずである。

このように口語訳マルコ伝は、口語体の中に文語体が残存し、かつ口語体は丁寧な「ござります」体とそうでない「である」体が併存するという、多彩な文体の盛り込まれたテキストである。現代の口語訳聖書にせよ、明治・大正の文語訳聖書にせよ、口語なら口語、文語なら文語で文体的に統一されており、両者の混在はふつつ見られない。そのような統一的観点からするならば、この口語訳マルコ伝は破格の文体で綴られていることになる。1881（明治14）年刊行という時代的な背景、文体模索期の混沌とした状況がこれを可能にしたと言えよう。統一的な規範意識に縛られた現代では考えられない自由な発想である。

そもそも文語訳マルコ伝の口語化改訳は、日本人のためでなく外国人宣教師のためになされたという（藤原 1974:149）。具体的には日本語教育課程委員のアメルマン（J.L.Amerman）が井深に改訳を依頼したとのことである（佐波 1938:355）。当初から日本語学習素材を前提に改訳したのであれば、教育上のねらいから意図的に多彩な文体を盛り込んだとも考えられる。

いずれにせよ口語訳マルコ伝は、複数の文体が並行しながらも、全体として調和が保たれた、類い希な福音書である。

## 9 付録『新約聖書 馬可傳 俗話』電子化資料について

ここに取りあげた口語訳マルコ伝の原本は、現存数が少なくアクセスが容易でない。後続の改訂版やローマ字版はインターネットで閲覧できるが（下記資料 URL 参照）、もとの1881年版は本稿執筆（2016年8月）の時点でインターネット上に画像や文字情報などの存在を確認することができない。そこで、この福音書に興味をもつ人が利用しやすいよう、本文の内容を書き写した電子化資料を本稿の付録とすることにした。底本として日本聖書協会の聖書図書館（東京・銀座）蔵本を利用させていただいた。

筆者は前稿（松本 2015）で、マルコ伝の文語訳と口語訳の用字用語を比較するために、文語訳テキスト〈<https://ja.wikisource.org/wiki/馬可傳福音書>〉に口語改訳箇所を書き入れた基礎資料を作成した。このたび本稿の付録とした口語訳マルコ伝の電子版は、前稿で作成した資料にさらに手を加え、原本の文字情報をなるべく忠実に再現したものである。

周知のように明治前期は句読法が未発達で、この口語訳マルコ伝も読点をほとんど用いず、しかも漢字の使用にも控えめであるため、分かれ書きのない平仮名が連続し、読み手が苦慮する箇所もある。例えば下記資料 (a) のように、第13章37節では仮名ばかりが40字も連続する。電子化資料では、このような場合も原文のまま書き写した。なお同じ箇所について、1894年刊行の後続版 (b) では読点を補い、さらに1934年版 (c) では過剰とも思えるほど読点を増やしている。(d) のローマ字版は、語単位の分節方法を基本にしている。

未発達な句読法と並んで、当時としては珍しくない濁点の省略にも、読解の努力が求められる。例えば第9章の31節と49節について、1881年の(a)が「なぜなれば」と記している箇所を後続版は、(b)が「なぜなれば」、(c)31節「なぜならば」49節「なぜなれば」、(d)「Naze nareba」と補正している。(a)の読者は「は」に濁点を補って「ば」として理解する必要がある。このような場合も電子化資料では濁点のないまま書き写した。

さらに脱字や衍字（<sup>えんじ</sup> 不要な文字）なども原文の通り保存したが、写し間違いと誤解しないよう、適宜その旨を亀甲括弧〔 〕内に注記した。

縦書きの原文を横書きに転写するに際し、おもに次のような加工を施した。まず、改行・改段落のない一続きの原文を、節ごとに区切って改行・独立させ、各節の冒頭に章と節を示す4桁の番号を振った。例えば「1337」は第13章37節を意味する。また漢字の振り仮名はルビでなく、当該語句の後ろの山括弧〈 〉内に記した。そのほか細かな加工手法は、ほぼ前稿（松本2015第1節）を踏襲したので、そちらを参照されたい。

#### 【資料】4つの版における句読法の比較（第13章37節）

(a) 1881年『新約聖書 馬可傳 俗話』米国聖書会社刊

わがおこたらずにまもれとなんぢらにつげるのはすなはちすべてのひとつにつげるのである

(b) 1894年『新約聖書 ぞくごマコ傳』大日本聖書館刊

わがおこたらずにまもれと、なんぢらにつげるのは、すなはちすべての、ひとつにつげるのである [http://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/DTRP0320?SHIRYO\\_ID=226](http://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/DTRP0320?SHIRYO_ID=226)

(c) 1934年『新約聖書 馬可傳 口語體』アルパ社書店刊

わが、おこたらずに、まもれと、なんぢらにつげるのは、すなはち、すべてのひとつに、つげるのである <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1091727>

(d) 1903年『Mako den fukuin sho: The Gospel of St. Mark in colloquial style』大日本聖書館

Waga okotarazu ni mamore to nanjira ni tsugeru no wa sunawachi subete no hito ni tsugeru no de aru. <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825654>

#### 参考文献

- 井深梶之助 (1881) 訳『新約聖書 馬可傳 俗話 全』米国聖書会社（聖書図書館蔵本）  
 海老澤有道 (1989) 『日本語の聖書：聖書和訳の歴史』講談社（講談社学術文庫 906）  
 金沢朱美 (2013) 「アーネスト・サトウ、ウィリアム・アストン、ジョン・オニールらが使用した日本語学習書の一考察：『鳩翁道話』を中心に」加藤好崇ほか編『日本語・日本語教育の研究：その今、その歴史』スリーイーネットワーク、163～175頁  
 木坂基 (1976) 『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房  
 佐波宣 (1938) 『植村正久と其の時代 第4巻』教文館（2000年に同社より復刻3版刊）

- 沢田泰紳 (1984)「御雇教師第一号C・Sイビーの招聘をめぐって」地方史研究協議会『甲府盆地：その歴史と地域性』雄山閣、369～385頁
- 竹本英代 (2004)「宣教師の日本語教育：1890年代までのアメリカン・ボード宣教師を中心に」同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師：神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』（同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXVII）教文館、359～387頁
- 野村剛史 (2013)『日本語スタンダードの歴史：ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店
- 藤原藤男 (1974)『聖書の和訳と文体論』キリスト新聞社
- 松本隆 (2015)「明治文語訳マルコ伝福音書とその口語改訳版の用字用語を比較するための基礎資料」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『日本研究センター教育研究年報』第4号、96～107頁  
<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2015\\_Matsumoto\\_a.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2015_Matsumoto_a.pdf)>
- 山口仲美 (2006)『日本語の歴史』岩波書店（岩波新書 1018）
- 山本正秀 (1944)「デアルの沿革」橋本進吉ほか著『橋本博士還暦記念国語学論集』岩波書店、505～524頁
- 山本正秀 (1965a)「文法と文体：近代口語体の文末辞法の展開」森岡健二ほか編『口語文法講座（1）口語文法の展望』明治書院、277～293頁
- 山本正秀 (1965b)『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 山本正秀 (1968)「「デゴザル」体から「である」体へ」日本文体論学会『文体論研究』第12号、18～27頁
- 吉野作造 (1929)「『交易問答』解題」日本評論社『明治文化全集』第9巻・経済編、3～5頁
- 李長波<sup>りちょうは</sup> (2010)「近代日本語教科書選集 解説」クロスカルチャー出版『近代日本語教科書選集 第10巻』横組み(1)～(91)頁
- 李長波<sup>りちょうは</sup> (2011)「近代日本語教科書選集 第3回配本 解説」クロスカルチャー出版『近代日本語教科書選集 第14巻』横組み(1)～(44)頁
- Publishing Committee (ed.) (1883) *Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan: held at Osaka, Japan, April, 1883*. Yokohama: R. Meiklejohn & Co.  
<<https://archive.org/stream/proceedingsofgen00geneuoft>>